

來なくならざるをえない。イエガーは「かくて個人と國家とのアンティノミオがはじめて問題となつた」といつてゐるが (Jager, Aristot. s. 395)、純粹な理性生活の問題と、生活現實の問題とを峻別しなかつたために生じた矛盾でもある。

之を要するに、アリストテレスは、理想國家の映像を描かんとしては、純粹な倫理學政治學經濟學の立場に影響され、純粹な學的な體系を組織するには、餘りにあるべき理

想に幻惑されたといつてよい。しかもそのいづれに進むにしても、もつと深き現實生活の地盤に立つべきであつた、それがなかつたために、諸現象の表面に浮ぶ形體を描寫しまたその形體描寫に終つたといふべきである。

唯、事物本來の性格如何といふところから出發してゐるのは一見、根柢的に物を洞察するかのやうにみえる。けれどもそのことは屢々獨斷的前提であるために、その方法が反つて考へ方を觀念的にする推進力となつた嫌ひなしとしないのである。

北部佛印の青銅器時代に就いて

梅 原 末 治

一

佛領印度支那に於ける考古學上の遺物遺跡に關する調査

研究は、前世紀の末年に遼東學院が設けられて以來組織的に行はれることになつて現在にまでつき、諸方面に輝しい業績を擧げてゐる。こゝに對象にとつたその北部の青銅

器時代の文物に就いても、調査の開始と共に關係の遺物が蒐集せられ、それ等に關する記述が早くから學院の報告に見出されるのである。而して一九二四年に着手したパジ・⁽²⁾ 一氏 (M. Pajot) の安南清化省東山 (Dong-Son, Thanhhoa) に於ける同代遺跡の發掘が重要な新事實を示して、是等の資料に立脚したゴルベフ博士の「安南及東京に於ける青銅器時代」なる綜括的な論文が、公にせられるに至つて世の心を高め、それが本邦にも知られてこれが問題に就いての關基準として、現在も依據せられつゝあるのは顯著なことである。併し右のゴルベフ博士の所説に就いては嚮に、イネ・ゲルデルン博士近くはカールグレン教授等から異見が提出せられたことであり、また其後ヤンセー博士の關係遺跡の一層周到な學術調査が行はれ、新しい知見が加はり等して、それ等が他方東亞に於ける一般考古學的知識の擴大と相俟つて、今やまた考察を新たにすべき段階に到達したことを思はしめるのである。されば平素から東亞の青銅器時代に特殊な興味を持つてゐる私は、嚮に佛印に旅する機會を得たについて、右に關する知見を得ることに一つの

期待を掛けた次第であつた。これが幸にも遠東學院當局者のなみなみならぬ好意に負ふて、有名な東山の遺跡を見學する便宜を得たばかりでなく、同院所管の諸博物館で自由に關係の遺品を調査することを得て、實物を通じての觀察から一つの見解を樹てることが出来たのは欣快とする所である。されば與へられたこの機會に右の鄙見を綴つて、佛印の文物に關心する人士の參考に供へると共に自らの備忘に資することにする。

(1) L'Ecole Française d'Extreme-Orient.

(2) Bulletin de l'Ecole Française d'Extreme-Orient, (B.E.F.O.) 1901

(3) V. Goloubew: L'Age du Bronze au Tonkin et dans le Nord-Annam (B. E. F. E. O. XXX, (1929)

(4) Heine-Geldern: Bedeutung und Herkunft der Metallkornmeln (Asia Major, Vol. IV, 1922)

(5) Bernhard Karlgren: The Date of the Early Dong-son Culture (Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, No. 14, Stockholm, 1942.)

(6) Olov Jansse: Rapport préliminaire d'une Mission archéologique en Indochine auprès de l'Ecole

11

さて北部佛印に於ける青銅器時代の遺物には種々の類が並び存して、うちに特色の豊かなものゝある事、上記ゴルペフ博士の論文の明示する如くであるが、中でも銅鼓なる著しい遺品を含んで、その遺品の多いことは、銅鼓自體が東南アジアの古代遺物として、早くから學者の關心に上つてゐる點で、その性質の考査に新しい據所を與へるものとして特に注意を惹いた。而して東山遺跡の實際から同博士

がその實年代の一點を推定したのは、過去六十餘年に互る銅鼓研究史の上に劃期的なものと云ふても過言ではなからう。銅鼓が元來樂器の一種たることには問題などないが、而もその示す形と器を飾る裝飾文とは古代文化圏に見る所と大いに趣を異にしてゐて、各種古銅器の製作に特殊な發達を遂げた中國古代の文物にあつても未だ類例を見出し得ないものなることは、その性質の解明が學界から要請せられた所以に外ならぬ。か様な遺品が北部佛印に多數に見出

されて、うちに考古學上の所謂「一括遺物」を含むことは問題の闡明の上に引いてはまた同地の古代文物を攷へる點で、重要な分野を占めることの當然さが自ら肯定せらる筈であり、現實にゴルペフ博士以下佛印の青銅器關係の所論がそれに一つの重點を置いてゐることも充分理解せられるのである。

併し翻つて考へるに、銅鼓が異色の所産であればあるだけ、か様な器を作り出すに至つた民衆の全般の文物の如何が追求せられなければならぬ。換言するとそれと共存した筈の多くの遺物との相關々係、一層普遍的な遺物の實體を確めることが、考察に蓋然性を與へるものとして、兼てそれが問題の青銅器時代の性格を想定する上に一層望ましい事が認められるべきである。この考古學上の常道に就いては、既往の諸論致に於いて、東山遺跡の示す遺物の相關々係が重視されて、立論の根據となつてゐることから、注意に上つてゐるのを知り得るが、而も根本に遡つて、それを明にしようとする點に至つては、なほ未だしの憾なきを得ない。行はれて來た所は東山出土の一括遺物に見る主な類

を列記して解説を加へた上、その一部を取り上げて年代を致へ、問題の銅鼓の性質を推すと云ふ程度にとどまつてゐて、各遺物に就いて當然行はるべきそれ／＼の型式學的な觀察の如きは極めて不充分と云ふよりないのである。

一體考古學者の取扱ふ遺物中古代人の生活と結びつく最も重要なものが利器と容器との二者であるのは明白なことであつて、殊にその利器は今日見る人類の使用した器物の最初の段階から現在まで行はれた主要なものとして、彼の古代文化三段階説が、右の利器の質料に基くこと改めて言を要しないのである。

されば北部佛印の場合にあつても、この利器の性質觀が容器と共に先づ顧みらるべきで、それが究められてこそ自餘の遺品の占める位置が正しく理解せられる筈である。ゴルペフ博士の所論に於いても容器が取り上げられ、また銅利器も記述に上つて、うちに例へば脊形銅斧の如き、特殊な器形の遺存が注意を惹き、器上に表はされた圖文の銅鼓文との類似が指摘され等して、興味ある見解が示されてゐることではあるが、右の器形に就いて考古學上當然行ふべ

き型式學的研究を缺いて居り、自餘のそれにあつても同様な傾向が強い。そこで筆者はフィノー博物館 (Musée Lois Finot, Henoir) との出來た實物に即して、本小文では主としてこの點に關其他で調査することを考察を行ひ、既往の缺を補ふであらう。而してか様な攷察を通じて、實は問題となつてゐる銅鼓其他の特色ある遺物の作られた背景が明となつて、それ等の性格の自ら闡明せられるものゝあることは、以下の記述が示す如くである。

三

北部佛印の各地から青銅製の利器が多數に發見せられることは遠東學院の報告に所載の關係の記事から夙に知られてゐて、それが東山遺跡の發掘以來ゴルペフ、ヤンセー兩博士の論文に依つて一層明瞭の度を加へて、それ／＼に特色を持つてゐることが確められる様になつた。いまこれを河内のフィノー博物館收藏の實物に就いて見るに、發見せられてゐる利器の種類としては斧類、短劍、矛、戈などが擧げられて、その銅戈を除いては孰れも發見例が夥しく、

同じ類の間に形の細部に差異を示すものゝ並び存すること
が認められるのである。右の各種の青銅利器が多數に遺存
する事實は、この地方に古く青銅の利器が廣く行はれてゐ
たこと、換言すれば、それ等を主要な利器とする考古學上
の青銅器時代のあつたのを物語るものとして重要視すべき
である。そして是等のそれ〴〵の利器のうちに形の上で差
異を示すものゝ並存するのは、吾々に型式學上の考察の可
能を示唆すると共に、兼て主要な利器からするその性格に
推測を加へ得ることを考へしめるものである。

是等の實際に就いての詳しい解説は、限られた本編の範
圍を超へるので、別の機會に譲る外ないが、例を斧頭に取
つて見るに、それには一方に柄を挿込む爲の袋穂を作つた
短冊形の割合に簡單な遺品をはじめとして、同じく木に袋
穂のある斧で、その刃部の開きに狭廣の違ひを示す類、右
の刃部が左右に大きく開いて一種の扇状をしたものや、有
肩石斧と同じ形をした遺品等から、更に袋穂が身に對して
やゝ斜に作られて、刃部が一方に長く延びると云ふ特殊な
形態のもの——これが一部人士の杵形銅斧と呼んでゐる式

で、他の地方ではなほ殆んど類例が見出されてゐない——
等に互つて、最後に擧げた形をした遺品の發見例が特に多
い。ゴルベフ博士の注記したのは右の一層特色を増して、
その面に繪畫的な裝飾文を加へた類であり、かくて示す所
甚だ多様なものがあるのである。處が是等の遺品を通觀す
ると、か様な多様のうちに、自ら形式の前後を推さしめる
ものがあつて興味を感じしめる。そして右の形式の推移と
して、ほと記述の順序に、支那人の所謂斤と呼ぶ最初に擧
げたものから、他地域の青銅利器になほ類例のない杵形銅
斧への形の發展が認められるのは注目すべきである。

同様な事象はこれを他の銅矛に就いても、また短劍の場
合に於いても認められる。即ち矛にあつては身の關に近い
處が擴大して發見例の多い點から、同地の銅矛を特色づけ
る如く見える形式の如きも、別に遺存する銅矛の形を顧み
ると、また割合に單純な柄着裝の利器からの發展の迹を辿
り得ることが必ずしも困難ではない。銅劍にあつては、身
の扁平化と裝飾文の附加や、握柄の上に見る推移がまた實
物を通じて可なり明瞭に辿ることが出来る。

従來の關係の論文に於いて明な如く、北部佛印出土の青銅利器は、それ／＼に就いて可なり強い特色を持つものとせられて、それが研究者の興味を唆り、引いて器形の基く所に就いての推論を見たこと例へば杵形銅斧に於けるが如くである。處が以上の様な事實が實物の側から確められて見ると、特色の強いそれ／＼の器形はその土地での發展形態となつて、外に形の起源を求めようとする従來の人士の用ゐた方法の誤つてゐたことがはつきりとするばかりでなく、右の利器の形式觀を通じて、北部佛印に於ける青銅器時代が特色のあるものなること、換言すれば同地の民衆が、その文化過程に於いて、特殊な性格を銅製利器の上に示現したのを實證する點で、極めて重要な意味を持つことが改めて注意されるのである。

四

各種の銅利器を通じて、一つの地區にこの様な器形の發展系列が辿られることは、また遡つてそれが同地に於ける青銅文物起源の問題にも聯關する所があることを思はしめ

る。一體か様な事象は該文物がその地で環境なり、民衆の生活に即して徐々に發展したことを物語るものと解せしめて、上記の北部佛印に於ける青銅器時代の存続をば主要な利器の上で立證するばかりでなく、割合に簡單に見える器形から特色あるものを作り出してゐる點で、一見青銅使用の起源自體をもそこに發したとする解釋を加へ得る外觀を呈する。併しこの場合右の是非を實物に就いて検討すると、現存する初の段階たる諸利器がすべて鑄造であるが上に、外形の最も單純に見える斧にあつても、實は袋穗が作られてゐる點で、一つの特色を持つてゐるのは既に進んだ形式の段階を示すものとすべく、矛・劍に於いても、後の特色の著しい形に較べてこそ簡單であるが、また既に可なりの發達した器形を具へてゐて、すべて銅の知識を得た當初、石器の形を寫した古拙な類に較ぶべくもない。こゝで別に遺存する銅戈なる勾兵が、極めて特色の顯著な利器として石槍からそれまでに永い發展の段階を豫想せしめるものたることが改めて顧みられるのである。是等の點は現實に石器とか様な器との仲間形に位置する遺品のなほ見出されて

のない事實と結びついて、それ自體の發達と解するとは反對な、器形の基く所が他にあると見る外ないことを示すものとせなければならぬ。而してこの見解を裏書きするものとして地理的に近接した中國の古代の銅利器に同種の器形が存し、同國が廣く東亞を通じての古文物の中核體をなして、四周に該文物を波及せしめたことが一般に認められてゐる事實が擧げられるのである。

中國古代の銅利器に關する吾々の持つてゐる知見は現在なほ極めて不充分であつて、未だその發達の大本を辿り得るまでに至らないが、而も昭和三年以來行はれた河南省彰德府外の殷墟竝に殷墓群の學術發掘に依つて示された諸事實と、漸次加はりつゝある關係遺物の知見とを以てすると、うちに顯著な特色のあることが窺はれて、従来の西亞細亞・埃及・歐洲各地のそれ等と性格を異にするものゝあることを推さしめるものがあり、その器形の特色として、戈・鉞等の勾兵の著しい發達と、斧頭に於ける袋穗のある「斤」の形などの存在を擧げることが出来る。處がこれ等の利器形こそ既記の北部佛印に見るそれ／＼の銅利器形の

最初の段階に相當るのであり、殊に銅戈にあつては、出土地の局部を明にせない憾はあるが、河内附近で得たと云ふ遺品の或者の如きは、現實に中國の戈と認むべき諸條件を具へて一段と特色を加へた東山出土の銅戈の基く所の原形たるを想定せしめるものたるに於いて、そこに問題をのこさるべきを思はしめるのである。然らば北部佛印に於ける青銅器時代は、支那中原の同代文物の波及に依つて青銅の利器を得た同地の民衆が、それを享けて、而も發展せしめたものたることが歸納せられて來て、自らこゝに關係の事項を考へる基準が規定されることになるわけである。

五

日常生活に緊密に結びつく、利器に就いて如上の所見を得たことから、今や進んで自餘の青銅製品の示す處を、それと聯關して考察すべき順序となつたが、これに關しては既に屢々觸れた銅鼓なる著しい遺品をはじめとして、桶形銅器、洗形銅器、瘡壺様銅器、鐘形銅器などの目立つた器物があつて、それ等が一種の胸飾板以下諸種の裝身の銅製

品等と共に、孰れも豊かな特色を具へてゐることが注意せられるのであり、更に是等と銅利器との共存状態が東山遺跡の檢出とその調査とに依つて、結合の實際が示されるに至つたのは考察上の重要な點として、改めて指摘せらるべきであらう。

右に記した一々の遺品の解説は紙幅の關係上省略するより外はない。幸にゴルベフ博士の論文に割合に詳しく記載されてゐるから、讀者にそのの参照を期待するが、是等の青銅製品に認められる通性としては、大形の各種の銅器や裝飾具に於いて、器形なり裝飾文に他地方の銅器に類例を見出し得ない色彩が濃厚に表はれてゐて、而もそれが各器相互の間に緊密に結びついてゐることが擧げられる。一例を記するならば桶形銅器の如き、それは今日のバケツに似た外形をして、本来木桶の形を銅で寫したことを思はしめるものであるが、器の兩肩に加へた把手の形に特色があるのみならず、或者には銅鼓に於けると同様の華やかな飾船の畫が表はされてゐて、それ自體の特色と共によく他の遺物との連系を示すものがある。形の上で珍らしく中國漢代

の銅洗と同じ趣を呈した洗形銅器にあつても、その外面に銅鼓文と全く同一の圖文を施してゐる點では、また同じ通性を具へたことが認められるのである。處が是等の遺物をばそれ自體に即して觀察してゐると、その間に形式の前後を想定し得るものゝ竝存することが知られて更に興味を加へる。いまこれを遺品が多く、且つ目立つた銅鼓に就いて見るに、ヘーゲル (Hegel) がその第一形式として一括してゐるものゝ間にあつて、形の細部なり、裝飾文を通じて更に前後の幾段階かをば新たに設け得ることの可能を考へしめるが如きがそれなのである。

こゝでは是等の遺物と既記の銅利器との相關々係を考へなければならぬことになるが、それに就いての東山遺跡に於ける考古學上の一括遺物に見られる竝存状態に對して、別に個々の遺物に於ける形式上の同似性に、それを裏書きするものゝあることを記する必要がある。右の一例は銅鼓や桶形銅器などを飾つてゐる繪畫文の整ふたものが、特色の最も著しい杵形銅斧の面に印せられた圖文と趣を同じくすることであり、また銅戈の或者に見る裝飾戈が胸當金具の

の手法を等しくし、なほ銅鼓文の或段階とも同似を示す如き點が擧げられるのである。而して是等を通じた圖文が、中國の古銅器文其他と趣を異にしてゐることが顯著なのである。して見れば是等の銅器は、銅利器發達の後半の段階に於いて、その民衆が鑄銅技術の修熟に伴ふて作り出した所産として、銅利器が既述の特色ある形となつてゐる點から、その出現が正しく理由づけられるであらう。而して多くの器が特殊な形をしてゐるのも、その地に早くから行はれてゐた他の質料を以て作られた器形をば、新たに青銅で作るかへたとすることに依つて合理的に解釋せられると思ふ。この點で銅鼓の祖型の如きも、ゴルベフ博士が、籐蔓製の臺の上に普通の太鼓を置いたものとした見解は傾聽すべきであり、桶形銅器の如き、また木の桶に原形のあることは動かないと思ふ。たゞこの場合一種の鐘形銅器が形や圖文の上で部分的に中國の古鐘に類似を示しながら、他方にまた違つた色彩を帯びて、それが單に北部佛印ばかりでなく、南部佛印からマライ半島に廣く分布してゐることは異色あるものとして、これが性質の考究は將來に俟つべき

北部佛印の青銅器時代に就いて

であることを示唆する。右の類としてこゝに東山出土に係る一例とマライ半島セラングール (Selangor) 發見の遺品 (通高二十二吋大英博物館所藏) とを特記して置こう。

(1) V. Coloubeu ; Sur l'origine et la diffusion des tambours métalliques, Hanoi, 1922

Selangor

六

以上は北部佛印に見る主要な古代銅器類を概観して、専ら考古學上の立場からその性質を攷へたのであるが、か様にそれ等が共通した特色を具へたものたる間にあつて、相違んで若干ながら、また別個の類の存することを閑却してはならない。それは東山遺跡の發掘に依つて資料を加へた中國古銅器の遺存である。既記ゴルベフ博士の「東京及び北部安南の青銅器時代」觀は、右の中國遺物に立脚して東山遺跡の營造年代から、それを一般に及ぼさうとしたものに外ならぬ。この種遺品の存在は同地方の青銅器文化が中國古代のその波及と見る如上の見解から當然肯定せらる

べきものであるが、東山遺跡では明白な前漢鏡・古鏡・銅劍等をはじめ、既に記した洗形銅器の如きがあつて博士は是等がすべて前漢代と見るべき特徴を具へてゐるとして、西紀前一世紀なる實年代觀を立てたのである。出土の古鏡や鏡に關する限りでは右の比定は誤つてゐない。併し既に原田淑人博士が論ぜられた如く、銅洗に至つては時代の後漢に下るべきことが認められると共に、他方出土の銅劍が漢以前に遡る遺品たることは近時の支那考古學上の所見から立證せられる以上、右の所見は是正を要する。既記カール・グレン教授の論文は、中國考古學上の新知見を以て再検討を加へて、東山出土遺品のうちに教授の所謂准河式——筆者の認めて戰國式銅器とする通性の認められることを擧げ時代を同代に遡らしむべきことを指摘した點で注意すべきものがある。

教授が右の根據として例示してゐる様に、東山遺跡出土の遺物其他には、戰國式銅器に見ると相似た裝飾文を附したものがあつた。併し文様表現上の特徴として戰國式銅器の持つ所の通じて箔に依る或單位文の繰返しは、筆者の實物

に就いて調査した範圍では、それ等に認め得ないのであり、且つ表はされてゐる圖文の主流に就いて見ると、戰國式銅器文と北部佛印出土の銅器文との間には著しい違ひがあつて俄かに同一視し難い。この事は前者に時に見受ける一種の象散文に於ける人物車馬などの圖を、後者の銅鼓其他に見る船の圖や人物圖と比較すれば極めて明瞭である。こゝで二つの文物の示す所を比較して、その同似から兩者の關係なり年代を推すに當つて、現時行はれ勝る單なる類似の面のみを抽出指摘する方法の妥當でないことが顯みられて來る。兩者のそれ〴〵の本質に就いての考査が先づ行はれて、これの上に同似が認められてこそはじめて、その關係が認められる可きであり、か様の見地からすると今の場合筆者は教授の所説が右の用意を缺いたものとして俄かに賛し得ないのである。

尤も既に觸れた東山出土品中の銅劍が中國の戰國時代に屬するものなることは教授も指摘されてゐる如くであり更に北部佛印の青銅文物の起源が本來中國の中原のそれの波及たる公算が大なる點からすると、問題の遺物のうちに

彼に類似するものがあること必ずしも不思議ではない。たゞその主流に於いて前節記した様に諸遺物が中國の青銅器のそれと異なる面が多く、主要點に於いて戰國式銅器と同一視難いことを思ふのである。かくて筆者は東山出土品の示す所を以て戰國式銅器との同似を強調する所見に對して疑問を持つのであるが、他面に於いて同地はじめ北部佛印出土品中に、既に數へられてゐる以外にも純然たる中國中原の遺品の存することを改めて指摘す可きであり、これ等が考察の上に一層緊要な資料を提供するものたることが考へられる。例を擧げるならば斧形銅斧の祖型とも認められる「斤」形銅斧の如き、また出土地こそ明瞭でないが、河内附近其他で出土の銅戈の如きがそれであつて、後者は特色の豊かな狭義の銅戈とであることが、特に興味を喚ぶのである。なほ銅矛、銅劍にあつても同様のものが見出されてゐる。處が是等の銅利器は今日の中國考古學上の知見を以てすると、孰れも時代の周に廻り得ることが充分に認められるものである。然らば既に知られた東山遺跡に於ける銅劍や、古鏡・古泉等と併せて、周代から漢代まで支那文

物が引續いて北部佛印に齎されてゐた事が立證せられるばかりでなく、時代の廻る右の利器類が、北部佛印の特色ある利器の祖型たること既に記した如くであるとすると、こゝに新たに中國青銅文物波及の時代がそれに依つて推測の據所を示すことになつて重要な意味を持つて来る。なほそればかりではなくて、時代を異にする中國の遺物がか様に並び存することは、他日北部佛印に於ける特色ある同代文物類の型式編年が行はれて、それとの共存關係が明確にせられることから文物推移の實年代觀を立て得るに希望をかけしめる次第であつて、關係する所たるや頗る大なりと云はねばならぬ。

七

東山遺跡の檢出に伴ふ同遺跡が數次の調査を経て、北經佛印の青銅器時代に關する知見は面目を一新するに至つたが、この様に論じて來ると、全般の性質を推すになほ極めて不十分な點が多く、問題をのこしてゐることが知られるのである。併し上來の記述にして大なる過誤がないとすれ

ば、同地に於ける青銅文物は中國中原のその波及に依るものであつて、それは時代の上で周代に遡り、爾後前漢代に及んで、その間に特色ある文物を發展せしめたと解せられる。而して通じて青銅利器の豊富な遺存から、東山遺跡にあつては既に一部に鐵利器も存在するが、そこに青銅器時代の存続を充分に肯定して誤りがない様である。

然らば北部佛印の青銅器時代は、早く中國の中原に發達した同代文物の影響を受けて、出現した點で、自餘の東亞諸國の場合と異なる所ない事になるが、當代の文物を通觀して見ると、それ自體の様相に於いて、甚く所の中國のそれとは著しく違つた面を持つてゐることが強く意識せられて來る。既記の特色ある日常所用の銅利器の發展形態の如き、また銅鼓なる特殊の文化所産を首とする種々の類の遺存などはそれを端的に示すものである。なほ是等が更に佛印から廣く東印度諸島に分布してゐることの知られるのは吾々に新たな興味を喚ぶものとする。

限られた本小文の範圍では、いまこの點にまで論及するの餘裕を持たないが、同代文物の示す右の様相に於いて當

然顧みらる可き一つの點は、高い中國の金屬使用の文化を受けながら、かゝる特色をそれ自體に具へた文物を作り出した理由であらう。これは換言すると高度の文化影響を受けながら、云はゞそれを自家のものとして特徴を表はしたことを意味する。従つて文物の所産者は固より中國人ではなくて、北部佛印に占據した別個な民衆であつたに相違なく、それが作られた遺品の上にその趣好を反映したものとせられよう。而も青銅の知識こそ持たなかつたが、それに發揮したことは、金屬の知識こそ持たなかつたが、それに先立つ石器使用の段階に於いて、既に一程度の發達を遂げた民衆であつたことに依つてはじめてその可能が理由づけらる可きである。約言すると右の事象はそれに先立つ文化の存在を當然豫想せしめるものであらねばならぬ。

處が北部佛印では恰もこれに相應じて新石器使用の時代に既に特色のある同代文化の存したことがマンズイ(H. Mansuy) フォーティエ(J. Fourquet) パント(Etienne Patte) コラニー女史(Mlle. Madeleine Colani)等の調査研究に依つて段々と明にせられてゐて、その石器にあつて

は特色ある有肩石斧の遺存が擧げられ、問題の銅斧に於ける斧の出現に聯關する所ある可きを思はしめるものがある。また日常の容器たる土器に於いても安南のダ・ブウ (Da-Bu Amam) 遺跡發見品の如きは、うちに東山遺跡出土の土器類との連系を通り得る類を見受ける。この兩者の關係に就いては今日なほ充分なる注意が加へられてゐない憾を残すが、それは近き將來に當然闡明せらるべき分野でなければならぬ。かくの如くして北部佛印に於ける考古學上からする古代文物の發達が永續した姿に於いて把握せられ、これを通じてはじめて時代に依る特色が一層よく理解されることになると思ふのである。

かくて同地に於ける青銅の文化は前代の文物の素地の上に、中國のそれを受けながら、著しい特性を具へたものと解せられるが、それも中原に於ける秦始皇の天下統一からそれを受けた前漢武帝の漢文化の一大エキスパンションに依つて、その勢力下に入り、遂に郡縣の一部と化して特色を失ふに至つた。これを示した遺跡が各地に見出されてゐることは、また同地方の漢墓の構造とその内容から推され

るのである。

北部佛印に於ける青銅文物の右の様な性格に對して、自から考へ及ぶことは、その前半の様相に於いて、我が上代のそれとの類似である。我が國にあつては彼の如くなほ青銅の利器に於いて時代を肯定するものを缺くが、銅鐸の示す所、祖型と認められる中國の編鐘をば全く換骨奪胎したものたらしめてゐる點で、相通する所が多い。廣く東亞に於ける古文化の交流がこう云ふそれ／＼の主潮の闡明の上に試みられることに依つてはじめて意義を持つものとして本編が單に佛印自體の問題のみならず、加様な點にも示唆する所あらば筆者の欣びとする所である。結末に當つて關係資料の調査の上に便宜を與へられた佛印の當局、特にヨルベフ博士、ギルシネー (P. Guilleminet) レノー (Paul Levy)、レニクス (Jean Manikis) 諸氏に感謝の意を表する。